

湛然の浄土教について

講師 小林 順彦

常坐三昧は智顗の『摩訶止観』中の修大行に説かれるわけだが、常坐三昧の方法を明かすなかで、身の開遮を説き、常坐して一つの静室に居し、一つの繩状に安んじ、九十日を一期となし、専ら坐して、迷悟因果一切隔て無き法界を觀念するが故に一行三昧という。默を常とするも、もし坐して疲極し、あるいは疾病に苦しめられ、内外において障りが生起する場合は、一仏に端坐正向することを可としている。智顗においてはその一仏が何であるのかは明言していないが、湛然に至って「諸經讀多在弥陀」として、弥陀一仏に決したのである。このことは確かに智顗と湛然の解釈の上での大きな相違であり、湛然が一仏を弥陀一仏に限定したことにより、常坐三昧を弥陀浄土思想と関連づけることに大いなる影響を与えたということが出来よう。ただし問題なのは、湛然が弥陀一仏に限定した根拠が「諸經讀多在弥陀」であるという点である。この文からは、確かに湛然が弥陀浄土に対して何らかの想いがあつたことは窺えるが、一仏を弥陀一仏に限定した積極的な意図が感じられない。加えて諸經が多く弥陀を讃じているから「一准」、即ちそれに依るというのは、これを以て湛然が弥陀浄土信仰者であつたと判断することが、些か早計であることを意味していると思うのである。

この一行三昧による果報として智顗は見仏することを説くが、「不取相貌」として色身見仏を得ながらも、またそれを否定しており、あくまでも空に立脚する。これは常坐三昧の依拠たる文殊問・文殊説両經が般若部に属するが故のことであり、湛然は『輔行』で般若を解する者に親近せしむるために、見仏という觀行が説かれるのだという。智顗が既に常坐三昧のなかで、「仏とは即ち法界なり」と言っているように、ここでの弥陀一仏は方便として施設されたものといえる。山口光円氏は上記の口説目の文を、湛然が弥陀浄土を信奉する証左として「十方仏の名字と弥陀一仏の名号を称すると功德正等なりと祖述されたのを見れば実に思い半ばを過ぐるであろう。」と解釈しているが、もとより天台の浄土教解釈は法界円融の原理に立脚しているのであるから、仏菩薩の法身自体と己心の関係において相即不離なる観点からすれば、功德正等の論理は弥陀一仏のみならず全ての仏に当然適用されるはずである。湛然もこのことは十分承知しているようで、それが故に、なぜ弥陀一仏を独り称するのかという問いを設け、功德正等というところに帰結させているのである。これは換言すれば、弥陀以外の仏を設けても成立はするという意図を想定させるのである。従って湛然が弥陀浄土信仰者であることを証明するには、四明智礼のように弥陀浄土教をもつて天台教学を展開する独自の理論の存在性を見出さなければならぬであろう。以上のことから、この山口氏の説は、湛

然が阿弥陀浄土信仰者であるという前提で進められた説であると言わざるを得ないのである。

天台浄土教を考えるうえで、湛然の存在は決して無視することは出来ない。ただし智顗の忠実な祖述者であるから、湛然も浄土信仰者であつたと短絡的に考えることには肯首しかねる。今一度、素直に湛然の著述に対峙して、彼の浄土教観を考察する必要があると思うのである。